

氏名・（本籍地）	中 川 仁 喜（栃木県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 54 号
学位授与の日付	平成 20 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目	近世天台宗の成立と展開
論 文 審 査 委 員	主査 宇 高 良 哲
	副査 小比木 輝 之
	副査 多 田 孝 文

中 川 仁 喜 氏 学位請求論文審査報告書

「近世天台宗の成立と展開」

論文の内容の要旨

天海は近世初期の天台宗僧侶である。比叡山、日光山を復興し、東叡山寛永寺を創建して関東天台宗の一大拠点とした。天海は江戸幕府、つまり徳川将軍家の帰依を受けてそれらの事業を成し遂げた。これまでの研究はその宗教政策面のみが大きく取り上げられ、天海の学僧としての一面はあまり語られてきていなかった。その理由は、歴史学から取り上げられる場合は政治史が中心になり、必然的に天海もその範疇において語られるからである。天海について総合的に扱った研究は、辻善之助博士著『日本仏教史』第八卷 近世篇之二（一九六一）、圭室文雄編『政界の導者天海・崇伝』（二〇〇四）、須藤光輝著『大僧正天海』（一九一六）などがある。いずれにせよ、天海の学識面は研究分野としては未開拓であった。

そこで本論文第一章では、天海の学識を三山「天海蔵」の成立と典籍の内容から考察した。「天海蔵」とは天海が主に生前蒐集した膨大な典籍群である。現在は日光山輪王寺と叡山文庫に蔵されている。「天海蔵」についての先行研究は主に書誌学からのアプローチがほとんどである。そこで第一節「三山「天海蔵」の成立」では、天海個人の蔵書がいかにして天台宗の一大蔵書「天海蔵」として成立したかを考察した。まず現存の「天海蔵」は天海が在世中に成立したものではなく、毘沙門堂公海が天海の寂後承応三年に分置したのである。その上、現在の通称であると思われた「天海蔵」が江戸期既に使用されていたことを確認した。これは新知見であり、今後「天海蔵」を考える上での基準となるものである。次いで、天海がいかに典籍を蒐集したか、その手段について考察した。常陸国不動院や下野国宗光寺の奥書があるものは、天海が当初より所持していた典籍である。しかし大半はあらゆる人脈を通じて、もしくは自らの権威を最大限利用して蒐集したものである。対象となった典籍は天台宗のものから法相、真言、禅から外典と呼ばれる医書、儒教、道教、歴史など多方面に及んでおり、天海の学識を垣間見ると同時に、宗門にとっての必要性をも感じさせる。この事業については宇高（二〇〇七）や中川（二〇〇六）に取り上げられるが、調査収集によってそのデータは日々蓄積されており、本論においても新たな史料による考察が加えられている。朝廷や武家、有識者からの贈与、もしくは典籍の貸借も取り上げるべき内容である。後陽成院や中院

通村、中原職忠など宮中、青蓮院尊純はじめ宮門跡、紀州徳川頼宣、所司代板倉重宗などの武家など、天海はあらゆるつてによって典籍を蒐集している。これについても、天海が幕府の宗教政策における最重要人物であったことが有利にはたらいたものと考えられる。さらに、日本初の完結した一切経、天海版一切経を取り上げ、影響を与えたとされる宗存版、そして底本と校合本について、開版から完成に至る概要と蔵地・目的について考察する。底本や校本、先駆けて刊行された宗存版については先学によるが、開版理由については、新たな視点を提示することができた。則ち願文に今上皇帝の玉体安穩、東照権現の倍增威光、四海泰平と国家豊饒、仏法紹隆、利益無窮、そして徳川家光の吉祥如意や武運長久が挙げられるが、この背景には刊行開始の年が將軍家光の不例による幕政の停滞、幕閣内部の軋轢、天候不順による凶作、さらには天草・島原において農民や切支丹の一斉蜂起などの不安要素があった年と一致している事実である。

第二章では、近世天台宗が成立していく過程を、門跡寺院と天海の関係を通じて論じている。天海は幕府の宗教政策に関与する以前は、常陸不動院にあって一学僧としての立場であった。当時比叡山では堂舎の再建と同時に、失われた典籍の蒐集、人材の確保が急務であったが、これが地方に求めねばならなかったのである。常陸で活躍する天海にとっても、その影響は大きかった。比叡山を事実上支配する門跡は頻繁に経済的・人的馳走を要請しており、関東の争乱で疲弊していた地方寺院に大きな負担を強いることとなる。だが天海は、これら中央の門跡寺院との接点を最大限に利用している。そこで、天海が門跡の持つ法流や權益をどのように捉えていたか考察する。まず妙法院坊官に宛てた不動院天海の書状を再考察することで、当時の天台宗の中央と地方、僧侶の動き、政権交替による影響を明らかにする。その根幹に、中世以来の複雑かつ流動的な本末関係、台密法流が深く関与している。特に不動院天海の書状は、台密蓮華流による本末関係を構築しようとした事例として取り上げられるが、妙法院の法流が蓮華流でであったのか、当時の門跡と地方寺院の関係が具体的に見えてこない検討を要する内容であった。ここで、本論では現在まで取り上げられてこなかった文書、さらには比叡山再興に関わる未翻刻史料を多数提示して、妙法院常胤の意図と、在地の天海等の現状と思惑といった現状を検討した。続いて曼殊院門跡良恕と天海の関係である。これは天海が良恕を押さえてまで北野社宮仕に助成している事例であり、結果良恕との関係に不和が生じたのであろうか、その後寛永八年に良恕が崇伝に幹旋を依頼するまで、良恕は日光東照社の法会などにも招請されず、座主就任さえ難しい状況に置かれていた。天海が門跡の進退に内々関与しうるのは立場上考えられることである。ここから曼殊院に対する天海の影響力がいかに変化したかを考察した。これらを通じ、天海と門跡寺院との関係を解明し、近世天台宗の形成を知る上での一助とした。

第三章では、天海が直接関与した毘沙門堂門跡を取り上げる。毘沙門堂は室町期から近世初期にかけて法脈を保ち続けた数少ない脇門跡の一つであった。檀那流の一流である毘沙門堂流の相承寺院として学匠の名や義科が著名である。しかし関連史料が少ない事、何よりも毘沙門堂門跡に関わる具体的な寺院経営を示す中世記録・文書が極端に少ない事から、これまで取り上げられてこなかった。しかし、毘沙門堂門跡が天台宗史を語る上で重要な位置にある事は紛れもない事実である。慶長十六年に天海は毘沙門堂室を後陽成天皇から預けられた。そして天海は弟子の公海を毘沙門堂門跡として養育した。結果として毘沙門堂は、時代の変革によってその位置づけを大きく変化させた。加えて古来の朝廷権威による伝統的門跡と、近世に入り江戸幕府の庇護の元で権威を確立した門跡との隔意も見取れ、朝幕関係を宗教政策から考える上で非常に重要な事例といえる。そこで第三章では、近世初期における毘沙門堂門跡の衰退から再興までを整理し、そこから当時の門跡とその相続に関わる諸問題も明らかにした。

これらは典籍蒐集、天台宮門跡の動向、毘沙門堂門跡の動向と事例こそ異なるものの、天台宗が中世か

ら近世に変質していくその過渡期を示す重要な事例である。そしてこれら全てに天海がそれぞれの立場で関与していることは、近世天台宗の再構築を明らかにする上で看過できない。一般的に近世天台宗は天海から始まると言われるが、その実態はほとんど明らかにされていない。そこで本論では、近世天台宗がいかに再構築されてきたか、そして天海がいかに関与したかを明らかにした。

結果として天海は、天台宗の復興、ひいては近世天台宗の再構築という時代の流れに身を置いており、自ら積極的に関与している。それが典籍の蒐集、台密法流の整備・再構築・毘沙門堂など名室の復興といった形で実現化された。大きく見て、天海の姿勢は天正十八年常陸不動院入寺から寛永二十年に東叡山で寂するまで変わっていない。天海は、その時々状況によって臨機応変に行動しているが、その姿勢は一貫して天台宗の整備・顕揚と東照権現の威光増進といった方向性に費やしている。そのためには天海自身に高い政治能力と、なにより深い知識と教養が無くてはならず、天海は歴史の表舞台に出てくる以前にそれを十分に身に付けていたのであろう。だからこそ、上方の門跡とも独自の姿勢で臨め、朝廷・幕府共にその能力を見だし、重用されるに至ったものと考えられるのである。

審査結果の要旨

本書は「近世天台宗の成立と展開」と題しているが、具体的には南光坊天海の動向を通して、近世天台宗教団の発展過程を研究しようとするものである。

南光坊天海に関する従来の代表的な研究としては、辻善之助著『日本仏教史』近世篇之二、須藤光輝著『大僧正天海』、圭室文雄編『政界の導者天海・崇伝』などがある。南光坊天海の動向は非常に多岐にわたるので、その中から本書では従来の研究の手薄な「天海の典籍蒐集と天海蔵の成立」「近世初期天台宗門跡の動向」「近世初期天台宗門跡の相承について」の三点に視点を定めて論述している。

本書の基本的な研究の姿勢は、筆者が天台宗の僧籍を有し、かつ本学大学院で日本近世仏教史を専攻している。そのためか従来の近世天台宗史の研究は天台宗の宗内の視点に立脚するか、または史学的視点に立脚するか、一方に片寄りがちであった。筆者は自己の特色を生かして、天台宗僧侶としての基本的な知識を活用しながら、近世天台宗教団の発展過程を南光坊天海の動向を中心に史学的考証を試みた。具体的な研究方法は先人の研究業績を例示しながら、伝記史料に頼ることなく、近年積極的に開拓されてきた天海の古文書、古記録、さらには典籍の奥書類などの信頼性の高い良質の史料を中心に、実証的な論考を積み重ねて、自己の見解を整理している。

以下、本論の内容について私見を述べてみたい。

第一章では、「三山天海蔵の成立」「不動院・宗光寺時代の典籍類」「典籍書写の推進と傾向」「天海版一切経の刊行と天海蔵」の四節からなっている。この中で日光山・比叡山・東叡山の三山の天海蔵の成立について、従来未開拓であったものを新史料を提示しながら、その成立過程を論証しており、評価することができる。

第二章では、「不動院天海と妙法院門跡」「三昧流本末と青蓮院門跡」「北野社公事にみる曼殊院門跡と天海」の三節からなっている。第一節・第二節では、関東における戦国時代以前の天台の法流相承について論述している。これは非常に難しい問題を含んでおり、後世の記録から逆算するのではなく、今後同世代の信頼できる史料をもっと幅広く研究する余地があるように思われる。従来未開拓の分野に挑戦した意欲は評価できる。第三節では京都北野神社の座配争論をとりあげているが、この争論を本格的にとりあ

げたのは、北野神社の別当が天台宗門跡曼殊院で、仲介者として天海がかかわっているからである。一般的に天海は辻善之助博士以来天台宗のために活躍した僧とされているが、この争論では珍しく神社の宮仕方に立って、曼殊院門跡良恕と対立したことを指摘している。珍しい事例であるので、その理由まで究明できたらもっと良かったと思われる。

第三章では、「毘沙門堂門跡の衰退」「毘沙門堂の再興と天海」の二節からなっている。ここでは京都の毘沙門堂門跡の成立と変遷について述べている。毘沙門堂は近世初期に天海の意向をうけて公海が再興した天台の門跡寺院である。しかしこの毘沙門堂門跡が江戸幕府の保護をうけて、近世の関東天台宗教団の中心的な働きを示すことになる。この毘沙門堂門跡について、従来まとまった研究はなく、今後の毘沙門堂門跡研究の基本となる研究であろう。

本論文の評価として、口述諮問で指摘したように今後の研究を期待する部分もあるが、全体的には従来未開拓であった分野を、新史料を活用しながら積極的に新知見を提示しており、充分本学の課程博士論文に合格するものと判定する。